33

山本致美訳『扶氏診断』と島村鼎甫訳『扶氏診則』

津下健哉

昨年度本学会で私は〔『扶氏診断』訳者への疑問—島村鼎甫の可能性〕なる演題を発表した。これは医譚（昭和十五年）に掲載された志賀勇著『扶氏漢訳医戒と布清恭』なる論文の中に「清恭もフーヘランドの診断の項を訳し、出版許可を藩に申し出たが、島村と言う人が同一のものを訳し、これを大洲の山本致美（有中）が買い取って上木したことを村田蔵六が知らせて来たので遂に出版を中止した」との記録を見たことによるものである。

ここで島村なる人物が誰かが問題となるが、私には岡山県の上道郡誌、及び松尾耕三著近世名医伝の島村鼎甫の項に『鼎甫将更遊江都。益研磨其術。賣嘗所譯述診則稿本。得金若干遂東行。就伊東玄朴而学』なる言葉があり、この『診則稿本』なるものが『扶氏診断』の原稿の全て、または一部ではないかと考えられることを学会抄録で申し上げた。

ところが学会の十日ばかり前、京都の三宅宗純氏よりお手紙を戴き自宅の書庫に山本の『扶氏診断』なる刊本の他に島村鼎甫訳の『扶氏診則』なる写筆本があるとの連絡を戴き、さらに学会当日には筆写本、並びにそのコピーまで御持参いただいた。帰宅して早速に『扶氏診断』の刊本と『扶氏診則』の筆写本の両者を比較したのであるが、

最初の凡例についてみるに二、三の字句の変更はあるものの他は全くの同文であることを認めた。次に本文についてであるが各項目につき対比してみるに語句の変更とか、言い回しには所々に変更を加えてあるのを認めるものの文の構成はほぼ同一であることを知った。強いて言えば『扶氏診断』のほうが平易、簡略と言ってよいかもしれないが、何れにしても鼎甫訳の『扶氏診則』を山本が買い取って多少の字句変更ののち『扶氏診断』として出版したことは間違いないことを確信した。尚『診断』は原本の最初から八三頁までの訳であるが、『診則』は七

四頁までで、この間九頁が欠となっている。

さて以上であるが鼎甫の『扶氏診則』の筆写本には嘉永甲寅夏六月の日付けが付されている。これは嘉永七年であり、安政元年でもある。鼎甫の適塾入門は嘉永五年であり、二十三歳の時であるので、その間は一年余であり、上道郡誌にも『居る僅か一年にして全科を卒業す。同学の諸生皆舌を巻いて畏服し、名声漸く四方に馳す』の言葉にも一致するが、一年余でオランダ語をマスターし、フーヘランドの原著でしかも翻訳の最も難しいと考えられる最初の総論の項を訳し、しかもその筆写本を完成させることは、如何に鼎甫が努力家であったにせよ驚異と言って過言でない。

ここで私は何時も次のことを思い浮かべるのである。即ち鼎甫の養子先の島村家は岡山市上之町であったのに対し、僅か百メートルばかり離れた下之町には石井宗謙が開業しており、そこには弘化二年二月から嘉永四年九月までの六年間、シーボルトの娘『稲』が滞在していたはずである。鼎甫は稲より三歳下であるが、当然『宗謙』、及び『稲』の顔を知っていたであろうし、話したこともあったであろう。多感な年齢の鼎甫にとってこれは大きな刺激であり、蘭学に対する関心はこの頃から始まったのではあるまいか。或いは『宗謙』、『稲』から蘭学の基礎を学んだことも考えられる。否、そうであったからこそ翻訳も可能であったのではあるまいか。

鼎甫はその後姫路の仁寿山校、また後藤松陰に師事、二三歳で適塾に入門する。そしてこれは良く知られていることであるが岡山当時七、八歳であったであろう宗謙の長男石井信義(謙堂)とはのち東大医学部の前身である医学所、東校の二等教授、小博士、中教授として常に同じ道を歩み、鼎甫は生理学を、信義は病理学を担当し、互いに親しい付き合いを続けるのである。

(広島県立身体障害者リハビリ・センター)